

## ハワイ大学にて

大谷 哲夫

### 一、ハワイ大学 宗教学科

ハワイ大学 (University of Hawaii) は、言うまでもなくハワイ州立の総合大学で、ハワイ州を構成するマウイ・カウアイ・ハワイ各島にキャンパスがある。なかでもオアフ島のマノアにあるハワイ大学の中核をなすキャンパス (通称、University of Hawaii at Manoa と呼ばれている) には通常一万八千人以上の学生・研究生を有し、ハワイ島のヒロのハワイ大学は人文・農業の二年と四年制で三千六百人以上の学生を有している。

ハワイ大学は、一九〇七年に農業と工業の単科大学として創設された。最初の授業はホノルルのダウンタウンでなされ、当時はたった五人の学生と二人の教職員のみであったという。が、一九二二年には現地のマノア谷の地に恒久的な大学が建設され、一九二〇年には芸術・科学部門が増設され、

一九七二年から現在の総合大学の規模となり、今日、ハワイ大学は総合大学として教育・研究は勿論、州・国また世界共同体への公共的な奉仕の機能を備えている。

現在、マノア谷の三百エーカーに広がるハワイ大学は、ハワイの商業・文化・政治の中心である州都ホノルルに近接し、諸外国から訪れる研究者、スタッフはじめ学生達におおくの便宜を与えている。

ハワイ大学は、その歴史上、ハワイに特有な地理上・文化的な特質をその研究主題にしてきた。つまり、太平洋上に位置するというその地理的な条件が、海洋学・海洋科学をはじめアジア・太平洋研究、熱帯環境の諸問題・資源等の学際的な研究を推し進めてきたのであり、ハワイという地理的特色が、津波研究・火山学・天文学・天体物理学などの学的方面を発展せしめたのである。また、ハワイの他民族文化とアジアとの近接という好都合な環境が、言語学・遺伝学・思想・

異人種の関係などの種々様々な文化の研究を進展させてきたのである。

現在ハワイ大学で行われている二百以上の研究は、その多くが国際的な広がりを見せ、特にマノアのハワイ大学には、そのスタッフに諸外国の研究者を多く含み、また諸外国からの学生も数多いということではアメリカの高等教育施設の中でも群を抜いているのである。

ハワイ大学の学部には八九の専攻部門があり、大学院の修士課程は八四の課程、博士課程は四二部門の課程がある。

ハワイ大学の、日本でいう「学部」に相当するのは次の通りである。

- ◇芸術と科学学部 (COLLEGES OF ART AND SCIENCES)
- ◇経営学部 (COLLEGES OF BUSINESS ADMINISTRATION)
- ◇教育学部 (COLLEGES OF EDUCATION)
- ◇工学部 (COLLEGES OF ENGINEERING)
- ◇健康科学と社会福祉学部 (COLLEGES OF HEALTH SCIENCE AND SOCIAL WELFARE)
- ◇熱帯農と人間生活学部 (COLLEGES OF TROPICAL AGRICULTURE AND HUMAN RESOURCES)
- ◇生涯教育と社会奉仕学部 (COLLEGES OF CONTINUING EDUCATION AND COMMUNITY SERVICE)

そして、たとえば「芸術と科学学部」は、

- ◎芸術と人間 (COLLEGE OF ARTS HUMANITIES)
  - ◎外国語・言語学・文学 (COLLEGES OF LANGUAGES LINGUISTICS)
  - ◎自然科学 (COLLEGES OF NATURAL SCIENCES)
  - ◎社会科学 (COLLEGES OF SOCIAL SCIENCES)
- の四つの部門を持つ。

ハワイ大学の特色でもある「熱帯農と人間生活学部」は「熱帯農と人間生活」のハワイ研究所でもあり、その他の専門職課程には、健康科学と社会福祉・医学・看護・公衛生・社会福祉事業の各部門がある。

その他の研究部門には、

- ◎ハワイ・アジア・太平洋の研究部門 (SCHOOL OF HAWAIIAN ASIAN AND PACIFIC STUDIES)
  - ◎図書館・情報学研究部門 (SCHOOL OF LIBRARY AND INFORMATION STUDIES)
  - ◎太平洋と地球科学技術研究部門 (SCHOOL OF OCEAN AND EARTH SCIENCE AND TECHNOLOGY)
  - ◎法律研究部門 (SCHOOL OF LAW)
  - ◎旅行産業経営部門 (SCHOOL OF TRAVEL INDUSTRY AND COMMUNITY SERVICE)
- 各部門もあり、夏季にはサマーセッション (SUMMER SESSION) も開かれている。

とじろで、私の所属させていただいた、宗教学科 (DEPARTMENT OF RELIGION) は、「芸術と科学学部」(COLLEGES OF ART AND SCIENCES) 中の「芸術と人間性」部門 (COLLEGES OF ART AND HUMANITIES) に属し、その事務所 (OFFICE 我が仏教学部の事務室に当たる) は「SAKAMAKI HALL」の三階A31号室であった。

“SAKAMAKI HALL”の三階は、宗教学科と哲学科に分かれていて、宗教学科の方には、勿論宗教学科の教授方の研究室・大学院図書室があり、私は三〇一号室を研究室として提供された。

因みに、宗教学科の入りの「ボード」にしたがって教授陣を挙げ、その専門領域などを簡単に紹介すれば次の通りである。

ジョージ タナベ (助教授) Ph. D. 1983 コロンビア大学。宗教学科主任。日本宗教、中世日本宗教。仏教思想、夢記・幻想・幻影についての研究。“Lotus Sutra in Japanese Culture”の共同編者であり、著書に“*Myoe The Dreamkeeper*”、“日本仏教の再生”(佼成出版)などがある。最近は、日本仏教者の論争、二〇世紀日本の宗派仏教についても研究している。(先生は私のハワイ大学での保証人であり、ハワイ大学に滞在中は公私にわたって本当に親切に種々にお世話をいただいた)

ハワイ大学にて (大谷)

ヘナード エリザベス (講師) Ph. D. 1990 コロンビア大学。仏教、インド・チベット宗教、女性と宗教。彼女の主題は、仏教とヒンズー教の奥義や伝統曼陀羅の研究で、著書に“*Tibetan Tantric View of Death and the After-life*”や“*The Living Among the Death a comparison of Buddhist and Christian Relics*”などがある。(先生にはニューヨークのコロンビア大学を案内して戴いた)

デビッド チャプル (教授) Ph. D. 1960 エール大学。仏教と中国宗教。ハワイ・アジア・太平洋の仏教研究、東西宗教の研究のディレクター、天台仏教の研究者で、“*Tien-t, ai Buddhism: and Outline of the Furfold Terchings*”翻訳出版者であり、“*Buddhist-Taoist Studies I・II*の編者”、“*Buddhist-Christian Studies*”の主幹でもある。(先生には研究室の関係もあって最初から様々にお世話いただいた)

ジョン チャーロット (助教授) Dr. Theol 1968 トニチ大学。ポリネシアン宗教、宗教学、宗教と芸術。キリスト教のハワイ・サモア・タヒチ文献の編集に専念している。著作に“*New Testament Disunity, Its Significance for Christianity Today*”などがあり、最近では、古代ハワイアン教育についても書いている。

クロムエル クロホード(教授) Th. D. 1965 比較倫理学、インド宗教、世界宗教における健康と薬。著作に“Evolution of Hindu Ethical Ideas”などがある。

ラムダス ラム(講師) Ph. D. 1991 サンタババーバラ

カリホルニヤ大学。宗教研究の方法論、インド宗教。南アジアにおける現代宗教と現地調査。著作に“Personalizing the Ramayan”などがあり、近年は中央インドの Untouchable religious movement について研究して近く出版予定。

フリードリッヒ サイファート(教授) Th. D. 1959 聖書研究、宗教心理学。

リー シーゲル(教授) DP. hil 1975 オックスホード大学。インド宗教。著作に“Vivisection”, “Sweet Nothing-101 Sanskrit Love Poem”, “Loughing Matter-India, s Comic Tradition”などがあり、最近はインド文化のなかの“恐怖と気味の悪いこと”について研究している。

ミット アオキ(名誉教授) DD. 1968 “生と死”の特別講義を受け持っている。

ロバート ボブリン(名誉教授) Ph. D. 1960 南カリホルニヤ大学。宗教社会学、社会倫理学、仏教社会学。

著作に“Revolution From Below: Four Case Stu-

dies From Thailand and Sri Lanka”がある。彼はハワイ大学の平和協会の創設者である。

ミッシェル サン(名誉教授) Ph. D. 1971 ロンドン大学。中国宗教、道教、曼陀羅研究。著作に“Taoism and the Rite of Cosmic Renewal”などがある。秋学期はハワイ大学で教鞭をとるが、春には北京の社会科学院に留学された。(日本への留学経験あり)

その他“Temp Faculty”に、ジョンソン・G氏、シーダー・D氏の二名、中国からのジャン・M氏とさらに、日本からの“Visiting Prof.”としての私の名前、さらに“T. A.”(教育助手)のプリスケルシー氏とガンスレイ氏の名前が掲げられていた。

アメリカの大学で、インド・仏教関係の教授がこれほどに揃っている大学はないとのことであるが、残念ながら大学院は修士課程までで、博士課程は今後のスタッフの充実如何のことであった。

次に、宗教学科ではどのような授業が行われているか、学生達に配布されるパンフから、一九九一年度の秋学期の授業科目名と指導教授を抜粋してみよう。

#### DEPARTMENT OF RELIGION

University of Hawaii at Manoa

#### SCHEDULE OF CLASSES FOR 1991 FALL SEMESTER

(Subject to change without notice)

INTRO WORLD REL	MWF	0930-1020	SEGEL
INTRO WORLD REL	TR	0900-1015	TANABE
INTRO WORLD REL	MWF	1030-1120	LAMB
INTRO WORLD REL	MWF	0730-0820	JOHNSON
INTRO WORLD REL	MWF	0930-1020	BENARD
MEANING OF EXIST	MWF	0830-0920	JOHNSON
MEANING OF EXIST	TR	1030-1145	SHIDELER
OLD TESTAMENT	TR	0900-1015	SHIDELER
UND CHNSE REL	MWF	0930-1020	SASO
UND JPNSE REL	TR	1030-1145	TANABE
UND HAWAIIAN REL	TR	0900-1015	CHARLOT
UND BUDDHISM	TR	1200-0115	BENARD
NEW RELIGIONS	TR	0130-0245	LAMB
ZEN BUDD MASTERS	TR	0130-0245	CHAPPELL
PROFESSION ETHICS	MWF	0830-0920	CRAWFORD
CHRISTIAN ETHICS	MWF	1030-1120	CRAWFORD
LOVE, SEX, REL	TR	1200-0115	CHARLOT
MYSTICISM E W	MWF	0230-0320	LAMB
FESTIVALS OF ASIA	MWF	0830-0920	SASO
DEATH & DYING	TR	1030-1145	AOKI
DIRECTED READING	TBA	TBA	
REL SOC CHNGE	TR	1200-0115	BOBILIN
POLYNESIAN REL	MWF	1130-1220	CHARLOT
SEMINAR IN REL	MWF	1130-1220	STAFF

DIRECTED READING	TBA	TBA
DIRECTED STUDIES	TBA	TBA
COMPARATIVE REL	T	0130-0400 BENARD
ZEN BUDDHISM	M	0230-0500 CHAPPELL
ETHICS & SOC CHNG	TBA	TBA BOBILIN
SEM INDIAN REL	W	0100-0330 SIEGEL

また、大学院での主な講義セッションは次のようなものがある。グド “Master of Arts in Religion” とくべンメント 簡単じ紹介やべつじんのじ技粹じつみやい。

476 *Taoism in China* (3)

Early Chinese religion, formative years (Han-Sui), developing years (T'ang-Sung), and the modern period; emphasis on religious Taoism. Satisfies area requirement for East Asia. Pre: 203 or consent.

480 *Field Methods in the Study of Religion* (3)

Theoretical and methodological approaches to fieldwork in the study of religion with experimental application of these in studying Hawaii's pluralistic religious community. Recommended for all graduate students planning to do field research in Asia or Polynesia. Pre: 300 or consent.

482 *Hawaiian Religion and Politics* (3)

The relation of religion to politics in Hawaiian culture

from the earliest records until today. Satisfies area requirement for Polynesia. Pre: 205, courses in Pacific Islands, or consent.

485 *Buddhism in Southeast Asia* (3)

Theravada Buddhism in Southeast Asia from the perspective of the traditional village, the kingdom and the nation. Response to urbanism and social change. Pre: 150, upper division standing, or consent.

646 *Indian Mahayana Buddhism* (3)

Origin and development of the major texts and themes of Indian Mahayana Buddhism. Satisfies area requirement for South Asia.

490 *Buddhism in Japan* (3)

Major features and trends in Buddhist thought, institutions, and traditions in the context of Japanese history and culture, 6th-13th C. Satisfies area requirement for East Asia. Pre: 204, 207, or consent.

492 *Polynesian Religions* (3)

Introduction to the field, comparison of several traditions; beliefs and practices from analysis of texts; historical interactions with Christianity. Satisfies area requirement for Polynesia. Pre: 150, 205, or courses in Pacific Islands, or consent.

647 *Tendai Buddhism* (3)

Origin and development of Tendai Buddhism in China

and Japan, and its relation to cognate traditions. Satisfies area requirement for East Asia.

648 *Zen (Ch'an) Buddhism* (3)

Origin and development of Zen (Ch'an) in China, Korea, Japan and the West. Specific themes and sources may vary from semester to semester. Satisfies area requirement for East Asia.

665 *Seminar in Religion, Ethics, and Social Change* (3)

Sociological, political, and ethical dimensions of religion with a focus upon comparative ethics, the roles of leadership, syncretic movements, modernization, technological revolution, and ethical conflict; topics to be announced each semester. Pre: 465.

667 *Seminar on Tibetan Religions* (3)

Selected historical, thematic, and textual research topics in Tibetan traditions to be announced each year. Satisfies area requirement for South Asia.

672 *Seminar on Indian Religions* (3)

Selected historical, thematic, and textual research topics in Indian traditions to be announced each year. Satisfies area requirement for South Asia. Repeatable for credit.

673 *Seminar on Chinese Religions* (3)

Selected historical, thematic, and textual research topics in Chinese religious traditions to be announced each semester. Satisfies area requirement for East Asia. Repeatable

for credit.

674 Seminar on Japanese Religions (3)

Selected historical, thematic, and textual research topics  
in Japanese religious traditions to be announced each  
semester. Satisfes area requirement for East Asia. Pre:

私は、学部・大学院のどの教授の授業にも、何時でも出入自由という大変な便宜を頂戴したが、結局は自分の専門領域に関連する、タナベ・サソ・チャプルの三教授の授業にお邪魔した。サソ・チャプル両教授の授業の特に日本の禅に関するところでは、熱心な学生たちの質問がどうしても私に集中するので、時間の許されるかぎりということで幾度か講義をもたせていただいた。

また、タナベ教授とは、今回の在外研究に当たって、奈良康明先生の懇意をえて、幾度となく文通を重ねていたので、初めてお会いした瞬間から何となく気が合い、これはタナベ教授が、私に大変気を使われて合わせてくれたのかもしれないが……。とにかく、ハワイ大学にご厄介になっている間中、最初から最後まで、宿舎のゲストルームであるリンカーンホール、ブッディースタディセンター、ヌマタホールの手配、またアメリカのID・ハワイ大学のスタッフとしてのIDの取得、帰国に際しての宗教学科の送別の宴に至るまで、公私にわたる細々とした何から何までお世話を戴いた。

ハワイ大学にて(大谷)

また、宗教学科の先生方にも何かと気を使って戴いた。特に、チャプル・サソ両教授には特別のご配慮を頂戴した。そうした宗教学科の皆さんにはどのように御礼申し上げます。意を尽くせないほど感謝の気持ちで一杯です。ここに、改めて感謝申し上げる次第であります。チャプル先生は、私の帰国間際に入院手術され、タナベ先生とお見舞い申し上げた時は頗る元気で四月からは教壇にお立ちになる意欲を語っておられた。元の通りのご健康を祈念する次第であります。

タナベ教授は今年から宗教学科の主任(学部の学部長に当たるかも知れない)になったとかで、非常に多忙ではあったが、研究室もすぐそばであったので、顔を合わせて時間の許す限り、週に幾度となく、日本の仏教、日本の現代の仏教、現代アメリカ人の宗教観、現代アメリカ学生の宗教観、また、当時アメリカの時事問題としてアメリカ中の話題となっていたセクハラの問題等々、時にはそこに顔を出した大学院生を交えて、時が経つのも忘れて語り合えたのは、実に楽しく有意義なことであった。

また、教授はハワイ仏教についても非常に造詣が深く、丁度、ホノルルの「アカデミーオブアーツ」でハワイの日本仏教について講演される際に、その準備にともない二週間にわたってオアフ島の主だった寺院を案内して戴いたのは、ハワイ仏教の実態を知る面で極めて貴重な体験であった。

以下の「ハワイ仏教」についてのレポートはその際の最初の感慨がもとになっているものである。

## 二、ハワイ仏教

戦後いち早く渡米され、ハワイで永年にわたって日本仏教の開教師として過ごされた一老宿より、次のような手紙を頂戴した。

ハワイも雨期が開けて夏の暑さが帰ってきました。四月の花祭り、ハワイでは「仏陀の日」と言いますが、このころになると暑い夏の太陽になります。一九五〇〜六〇年代には日系仏教徒が一万人以上毎年ワイキキのカピオラニ公園に集まってお釈迦様の降誕をお祝いしたのですが、今では千人に満たない仏教徒がハワイ仏教連盟主催の行事に参加します。その多くは白髪の子で、中年層と子供の参加が少なくなりました。

昔、ハワイでは「釈迦の降誕を祝う」と言うことは「全仏教徒の喜び」という共通の感情があったのですが今はそれがなくなってしまいました。十万の仏教徒の署名を集めてハワイ州政府に四月八日を州の祝祭日にするよう州議会に圧力をかけた時代が遠く去ったことを感じます。

今年の仏陀の日の法要の講演にハワイ大学の言語学部の部長が来て話をしましたが、世界の仏教徒の共通の意識として「DUKKHA」を取り上げ、これがこれからの世界中の人々の共通の意識になりうる可能性を語りました。

これからの仏教の布教は、もっと共通の基本理念を取り上げて一般仏教徒の生活信条になるようにしなければハワイの仏教は消えてしまうでしょう。勿論、これが全て英語でなされなければならぬ訳で、困難な課題を背負っています。ハワイには、昔、英国人の僧侶がいて、日頃、四諦の教えをハワイの社会に説いてくれていましたので、英語の仏教徒には「DUKKHA」が共通の意識として行き渡っていました。二世の仏教徒の活動が最盛期だったときのことです。

ハワイでは、日本からの宗派仏教が行き止まる日が来ることは誰の目にも明らかですが、まだ意地の張り合いがあったりで、解決の道は簡単には開けません。怠りなく社会の変化を見据えていくのでみす。

この手紙には、時代の流れとともに常に何らかの障害を受けそれに立ち向かい、そして今後とも常に新しい経験を強いられるであろう日本仏教の開教に携わってきた当事者としての苦悩が何げなく語られている。

その苦悩とは、すなわち、当然のことながら、米国ハワイにおいて全くの異国の宗教である日本の仏教が移民とともに渡り、ハワイの日系社会を中心に開教ほぼ百年を経て、二世の人々とともに隆盛を誇った過去から、三世中心の現在に至って見られる日本仏教の衰退を目的の当たりとする焦燥。そしてまた、真にゆっくりとではあるが判然としかも確実に、日



本語世代ではない米語世代の四世へと移り変わる何となく先  
の见えない未来に対して、日本仏教はどのように対応すべき  
なのかといった重大な問題等々である。

昨年八月より今年の三月まで、私はハワイ大学の宗教学  
科の教授の一員として滞在させていただいた。ほんの短い期  
間ではあったが、幸運なことにハワイにおいて真摯に布教の  
任に当たっておられる多くの方々の知遇を得、ハワイの日本  
仏教の実態についていくらかを管見させていただいた。

ハワイという現場において、昼夜をおかず懸命に身命を賭  
して布教の任に当たっておられる開教師の方々にとっての思  
いは、今後の仏教はアメリカ社会にどのように適応してい  
かという点で共通していたように思う。換言すれば、現在の  
ハワイでの「仏教」は、日本の既製仏教と同様に宗派仏教と  
して存在はしている。が、それは一面では既に「日本の」と  
いう形容詞を必要としないほどに離れていて、それはまさに  
「ハワイの」仏教になりつつあるという実感を重い背景とし  
ながらも、なお、その上で、これまでの日本語族中心であっ  
た布教を、今後どのようにして米語族へ波及させるかという  
点である。つまり、仏教が今後どのようにしてアメリカ社会  
の中で真に市民権を得て「生き残っていくか」ということが  
より切実な問題であった。

現在から将来に向けて、現実のハワイの仏教には種々様々

な問題が極めて多いが、今は手紙にも見られた問題の二・三  
についてのみ触れながら、ハワイの仏教への感慨を含めて記  
してみたいと思う。

ハワイにおける日本仏教の歴史的基盤は、官約移民時代  
(一八八五～一八九八)の九年間から、呼び寄せ移民時代(一九  
〇八～一九二四)の一六年間に、日本の各宗派の開教師によっ  
て、主に移民の人々が働く砂糖耕地内の「キャンプ」と呼ば  
れる居住地での布教よって築かれた。

現在、ほぼ百年を経過した日本の既製の宗派仏教の現有勢  
力を、現在のハワイ仏教連盟に所属しているものを基準に  
し、その寺院数を示してみると、

- ◇本派本願寺(西本願寺) 三七ヶ寺
- ◇真言宗 一六ヶ寺
- ◇浄土宗 一五ヶ寺
- ◇曹洞宗 一〇ヶ寺
- ◇東本願寺 六ヶ寺
- ◇日蓮宗 五ヶ寺
- ◇天台宗 三ヶ寺

となる。

その信者の確定総数は不明である。だが、各宗派の「別  
院」は別として、各寺は平均して、ほぼ一五〇～二五〇の檀

家（ファミリー）を持つとすれば、ハワイの日系の人口はほぼ二五万人といわれるので、その内の二五%ほどが潜在的な信者を含めた仏教徒の総数であると類推される<sup>(1)</sup>。

日本仏教の特質の一つは、中国において儒教を背景に培われた祖先崇拜を伴う仏教が日本に伝来し、神道とも習合・融合・共存し、結果として祖先祭祀が最重要行事となっていることである。

ハワイの仏教各寺院において行われている葬儀・年忌法要・祖先供養等の内容は、その行事の仕方に幾分かの違いがあるとはいえ、一応は現今の日本の各宗派独自の教義にのった行持・儀礼をそのままを踏襲している。

従来の日系の人々にとっては、家族の祖先祭祀をそのまま実行するためにお寺が存在し、さらに葬式・法要は日本と全く同じに家族単位に行われたのである。それは日本文化そのもので、仏教のありかたの説明をことさらに必要とはしなかつた筈である。それ故、当時の開教師達、つまり、日系の二世代までを布教の中心としていた方々は、それなりの苦勞は当然あつたであろうが、今日の開教師が直面している苦勞というものはなかつたであろう。

ところが、現在、ハワイでは従来のそうした日本仏教の伝統を守るべき単位が“家”から“個”へと大きく変貌してきている。先日のロスの暴動を契機に、今度は逆にあまりにも

行き過ぎた“個”の反省から、従来の良きアメリカの“家”へという保守化への回帰が一部では叫ばれはじめてはいるのだが……。

自分たちの悲しみを表現しえない退屈極まりない葬式に臨み、その遺族はその意義の分らない戒名を欲しがらず、先祖の位牌すらも遺骨とともに共同墓地に埋葬してしまう例などが出現してきているのはその典型である。勿論、こうした変貌の背景には、自由の国アメリカの合理的な民主主義、個人主義的な思考が厳然として存在することは自明である。が、その奥底には、ハワイの日系の社会といえども、もはや日本語が通ぜず、日本の文化伝統が理解できない新しい社会が作り出されていると言う現実が存在する確かな事実を語つてあまりある。

こうした日本文化の伝承を担う日本語の風化は、ハワイにおける日本の伝統文化の喪失、日本仏教の崩壊の一端を意味する。日本語から米語へ変貌、それは日本のパールハーバー攻撃を契機として急激になされたことは言うまでもない。そして当時、日本文化の象徴でもあつた寺院がその変貌の片翼を担つたのもまた、ハワイにおける日系社会の歴史的事実である<sup>(2)</sup>。

ともあれ、現在ハワイでは、日本文化を支えて来たその日本語を理解できない人々が日系寺院を支えざるをえなくなつ

てきているので、そこには過去においては考えられないような問題が現出して来ているのである。

さる寺院では、所謂信徒（メンバー）の権力が強くて、住職は単なる雇われマダムの存在に過ぎない、等というのは、過去における住職とメンバーとの様々な軋轢があつての、メンバーの自衛の手段とも思えないことはない。が、いずれにしろ、ハワイの寺院では運営のすべての権限はメンバーに握られているのが現状である。そこでは、住職としてまた開教師として、いわゆる宗教家としての資質と情操すらが蔽しく問われている。因みに、現在の仏教寺院のメンバー（信徒）と呼ばれている人々は、それが全てではないにしろ家族単位であるよりは個人単位である。さらに言えば、英語の話せる真の開教師の不足は慢性化し、そうした開教師の養成は叫ばれて久しいのであるが何ら進展を見せてはいないのが現状である。

“ハワイの日本仏教は死につつある”と声明したのは、私のハワイ滞在中の保証人となり親身になって世話をしてくれた親友であるハワイ大学宗教学科のジョージ・タナベ博士である。

この言葉は一九八五年に発行された“SPRING WIND”と称する機関紙に掲載された、博士の“The Death & Ren-

ewal of Japanese Buddhism in Hawaii”という論文の冒頭を飾る言葉である。

今、私はその論文の論旨の一々をここで云々する暇を持たない（場を改めて紹介したいと思う）。けだし、この言はハワイで生まれ育った日系の三世として、永年日本仏教に携わって来た教授の言であるので、それはまさにハワイにおける日本仏教の現状を直視した重き発言だといえる。

従来、ハワイの日本仏教は、米国という多民族国家の中でも、特に日系米国人の中においてのみ展開してきた結果、今日においても多くの經典・儀礼は日本語のままである。従って、日本語のみでしか通じない場合が多く、結果、米語しか話せない三世・四世の日系人の多くの信徒の寺離れ現象が進み、その回帰を期待して必然的にかんがりの部分で、多くの問題を含みながらも米語化・アメリカナイズされて来ている。因みに、ハワイにおける大きな教団ほど、組織だった布教のマニユアル化の傾向が顕著であり、弱小教団ほどその度合いが少なく、どちらかと言うと開教師個人の個性に頼る傾向が多分にある<sup>(3)</sup>。

もし、日本の僧侶で、ハワイの仏教は日本の仏教の移入であるから、ハワイには日本の仏教が定着しているなどと思えば、日本の宗派仏教の行持をそのままハワイにて行えば事足りると思っている方々がおられるとしたならば、それはとん

でもない誤解である。ハワイ仏教をそのように見る限り、今後はますます、日米間の仏教を巡っての対立と軋轢、さらに誤解とを生じ、そのミズはさらに深まって行くに違いない。

私自身は、ハワイの主だった寺院を管見するのみで、ハワイ各島に点在する個々の寺院について実地にその全てを調査したわけではないので断言はできない。が、ハワイでの日本人の習俗としての日本の宗派仏教<sup>4</sup>は既に風化しつつあり、そのかわりに、そこにはハワイの仏教が育ちつつあると云うのが、ハワイでの偽らざる実感であつた。

アメリカでは言うまでもなく、一月二五日のクリスマスは国民的祝日であり、四月八日は決してアメリカの国民的祝日にはなり得ない、まさにキリスト教大国である。ハワイでは、手紙にも見られたように、過去においてはその日を祝祭日にと云う運動がなされたのではあるが……。

今後、そのような中で仏教が真に生き延びて行くには、過去百年の重き歴史以上の大変な努力と苦勞があるであろう。

ハワイの仏教が、過去において試行錯誤を重ねながらも、日本の寺院とは異なつた信仰の日常化と深化を進めてこられたのは、キリスト教教会の「日曜礼拝」にならい、日曜ごとに信徒が寺に集まって読経し、聖歌を歌い、法話を聞くという「日曜聖集」を各寺院が実施したことである。それは今日

に至るもハワイの各寺院において踏襲され行なわれてはいるのである。

さらには、寺院の建築様式がその一端を担ったことも推察される。今日、ハワイの仏教各宗の寺院に参拝してみれば、その外観は種々様々な形態をとってはいるが、その内部の様式のほとんどは、正面の祭壇を変えれば、それはまさにキリスト教協会の内部のその模倣であることは一目瞭然である。

さらに、ハワイにおいて、浄土真宗本願寺派が圧倒的な寺院数と信徒数を誇る（勿論本土においてもそうである）のは、当初の移民の人々の出身地の影響も当然ある。が、仏教行持の仕方はいち早くキリスト教の伝道のそれに倣つたことにある。例えば、キリスト教の世界で言う「ツウエイ・コミユニケーション」と呼ばれる方法をいち早く取り入れ、所謂の「受け念仏」を浸透させたことは、布教する側と受ける側との親密な関係をもたらす上で欠く事の出来ない方法だったと言えよう。説教者側の「ナンマンダブ」に対して「ナンマンダブ・ナンマンダブ」と呼応するあれである。それは、説教者側の説教が決してワンウェイではないことを示している。さらに、いまでこそ、各宗派、こぞつてそれぞれの宗歌がオルガンを伴奏として歌われてはいるが、宗歌を聖歌と同様に Hammond オルガンを伴奏として英語で歌わせたことはさ

らに大きな意義を持ったのである。

“受け念仏”は今日、キリスト教の“アーメン”もしくは“オーイエス”あるいは“ハレルヤ”等と同じ語感感覚をもって日常使われている。オルガンの伴奏を伴う宗歌は、永い伝統を持つキリスト教の日曜日の全員で歌う賛美歌の迫力には到底及ばないにしても、米語世代の三世・四世の若い世代にも通用する旋律と相俟って新たな伝統を築きつつあるほどに浸透しているのは見逃せない事実である。因みに、本派本願寺において見事なオルガンを演奏していたのはハワイ大学数学科の勿論日系の女学生であった。

— そのように時代とともに変遷した寺院様式、さらには布教のノウハウのキリスト教化、また従来の家族の宗教から個への宗教への変貌へと、徐々にではあるがハワイにおける日本仏教は、その変化に対応し適応して来たのである。

そうした、ハワイ独自の開教の歴史を見ても、ハワイには当然ハワイ仏教独自のやり方・あり方があってしかるべきである。特に、ハワイの開教師はその一部でもハワイで養成する必要がある。また、ハワイ仏教は、日本仏教の日本でしか意味をなさない形骸化した伝統儀式にこだわらず、儀式の簡素化、特に特定の経典類のできる限り理解しやすい米語への転化等は早急に果たしていくべきであろう。そうした地道な一歩こそが、現在のハワイの仏教が大きく脱皮し、国際舞台

に飛躍する糧になるであろう。が、こうした古くて新しい、ハワイ仏教の重担は、誰しもが気づいている問題であるからこそ、それは次の世代の宿題ではなく、現今においてこそ真摯に対応し解決されなければならない問題なのである。

それにつけても、我が曹洞宗について一言すれば、米国人の師家が米国人のための“坐堂”をもっているのに、ハワイで、“曹洞宗”を冠する寺院が、“只管打坐”を標榜する日本曹洞宗の流れを汲むものであるとするならば、地方寺院は別としても、せめて“別院”と称する寺院ぐらいには、種々様々な事情があるにせよ、まやかしてはいきちんと坐禅のできる“僧堂”があつてしかるべきであろうと思う。

因みに、筆者のハワイ滞在中、曹洞宗は“坐禅”という素晴らしい教化手段を持っているのに、何故それを活用しないのか、とは他宗派の開教師の方々によく揶揄的に言われたことである。

ところで、現在、ハワイ仏教連盟に属していない日系の仏教団体は次のように極めて多彩である。

仏教系新興宗教団体は、

◎浄土真宗親鸞会ハワイ支部 ◎弁才天弁天宗ハワイ

教会 ◎菩提寺教団 ◎真如苑ハワイ ◎ハワイ

別院蔵王寺 ◎アメリカ日蓮正宗 ◎東大寺ハワイ

別格本山 ◎立正佼成会ハワイ教会 ◎阿含宗ハワイ  
 ◎臨済宗超禅寺（国際禅道場） ◎和宗四天王寺  
 ◎ハワイ解脱教会 ◎本門仏立宗ハワイ別院 ◎ハ  
 ワイ信貴山別院 ◎真言宗智山派総本山智積院ハワイ  
 別院 ◎臨済宗妙心寺派ハワイ花園妙心寺開教院  
 がある。

そして、さらにその他の日系の宗教団体は、

◎ハワイ日系キリスト教会（約二教会） ◎神社（約七  
 ケ社） ◎世界救世教ハワイ教会（六布教所） ◎P.L.  
 教団 ◎天理教ハワイ伝道庁（三七教会・三六布教所）  
 ◎成長の家ハワイ（二布教所） ◎天照皇太神宮教ハワ  
 イ州支部 ◎天神教ホノルル支部 ◎ほんぶしん・  
 ハワイ甘露の里 ◎大世自神霊宗 ◎嵩教真光ハワ  
 イ小道場 ◎金光教ハワイ教務所 ◎幸福の科学  
 等々、実に多くにのぼる。

何故、ハワイには日系の宗教団体がこれほどにあるのか、  
 仄聞するところによれば、それはハワイをそれぞれの宗教の  
 伝道の実験場として、米本土進出への足掛かりとしているか  
 らだと言われる。

それは、日本仏教の海外布教の出発点はハワイであり、ハ  
 ワイの開教の歴史こそが海外開教の歴史的原点であることを  
 いみじくも明示しているのである。

ハワイには“ハワイ仏教連盟”があり、これは、先に見た  
 本派本願寺・東本願寺・浄土宗・真言宗・日蓮宗・天台宗・  
 曹洞宗の七宗派で構成され、その組織は日本では想像できな  
 いほどに極めて機能的で相互に親密に協調しあって共通の目  
 的に取り組んでいる。例えば、毎年の花祭り・成道会・研修  
 会、あるいは信者を交えた懇親会等々の数多くの活動を通し  
 て、宗派の壁を越えて仏教全体を盛り上げて行く努力がなさ  
 れているし、東西文化の交流の場としてのハワイという地が  
 生かされ、日本以外の仏教国の人々との交流も積極的に進め  
 られているのである。

ハワイにおけるこれからの仏教独自の共通の理念、例えば  
 “DUKKHA”などの問題、ハワイでの真の開教師の養成の間  
 題、さらにはハワイ仏教独自のパフォーマンスとして、人間  
 の宗教心・感性に訴えるものの模索等々を含めて討議される  
 ことを大いに期待したい。日本においては不可能ではあつて  
 もハワイにおいては大いなる可能性を秘めているからであ  
 る。そうしたことで、各宗派が協力することはその宗派の独  
 自性を失うことでは決してない。むしろ、ハワイにおいて  
 も、今後各宗派が存続するということは、仏教には八万四千  
 の法門という多様性と幅広い選択の場のあることを証明して  
 見せていることにもなるのである。

ハワイ仏教のこれからの体験は、外ならぬ仏教がキリスト

教社会において真に市民権を得るか否かが如実に問われる、日本においてのアンテナショップ的役割をも担うのである。

さらに言えば、現代日本に見られる、つらい修行や堅苦しいお説教はさておき、ハイテクを駆使し極く手軽に宗教気分を味わおうとするトレンドに対して、日本仏教がどのように対応して行くかというある面での道標でもある。

ハワイの仏教は、既に「開教百年も経過した」とはよくいわれる。しかし、それはまた同時に「開教してたったの百年にしか過ぎない」ことをも意味するのである。

ハワイ滞在中、その仏教行事に快く参加させてくれた本派本願寺の中西総長・何くれとなく面倒をみて戴いた帆足輪番、さらに元総長でハワイ大学正門前のブッディストスタディーセンターの藤谷師、さらに牧野師・戸島師・松本師等々、また日蓮宗の小川総長、天台宗の荒総長、曹洞宗の松浦総監老師、遠縁に当たり、ハワイ仏教の行く末を心から案じ憂え、種々なるご意見を頂戴した別院の町田老師、永平寺同安居で二五年ぶりに再会、夜を徹して痛飲、カウアイ島からホノルルに出てくる度に我が下宿に泊まってくれた三好師、時々米語の正しい発音を教授してくれた駒形師、自坊が筆者と同教区であるところから、何くれとなく世話をしてくれた別院の飯島

師の皆さんには、ハワイ滞在中、大変なご好意を頂戴した。まことに有り難く、ここに記して感謝申し上げます次第です。

#### 注

(1) 因みに、ハワイの総人口は約百万と言われ、二五万人が日系で、その内の二〇万人がオワフ島に居住し、二〇万人が白人であるという。

(2) ジョージ・タナベ教授は、一九四三年ハワイのオワフ島のハレイワ生まれの日系三世で、祖父母・父母ともに日系人である。専門は仏教、特に日本仏教をその研究分野とされ、博士論文は明恵上人の研究である。近年の著に『日本仏教の再生』(原題は“Future Buddhism” 平成二年・佼成出版社・星野・鳥井共訳)があり、そこにおいても、教授の日本仏教に関する思いが種々に展開されている。特に、その中の、「VI 寺院」「国際化したハワイでの仏教の衰退」章で次のように書いている。「日本の文化は初期の日本人移民によってハワイにもたらされた。日本文化自体は、この移民たちが、ハワイに持ち込み移植した。この初期の移民たちのほとんどはハワイに永住する気はなかった。彼らは日本人として来て、日本人として生活し、日本に帰りたいと思い、帰れなかった時にも日本人として死んだ。(中略) ある日の午後、数日前から行方不明になっている日系人のおばあさんを捜索する、という呼び出しがあった。彼女の家族は、彼女が、日本に歩いて帰る時が来たよ、と言って出て

行くのを見たのが最後だと言っていた、(中略) 何年もたってから、私のおじの母が自宅付近の川に落ちて死んだ。彼女もまた、日本に歩いて帰る時が来た、と言っていた。何年ハワイに住んでいようとも、彼女たちにとって日本は帰るところであり、日本はいつも心の中にあつたのである。しかし、彼女たちの子供、つまり二世の考え方は違っていた。宗教的なことのほかに日本語、日本の歴史、伝統的な倫理を教え、日本の文化の守り手であつた寺院は、驚くべきことをやった。寺院は二世に良きアメリカ人になるように勧めたのである。それは簡単なことではなかつた。なぜなら、それは一種の精神分裂を強要したのに等しいものであつた。(中略) 日系人の経験は、特に戦争がアメリカ化の問題を際立たせたために、急激な文化変容の強烈な経験であつた。一つの世代へ移る間に、日本人の親から生まれた子供達は一瞬のうちにアメリカ人になつたのである。国際化が非常に早い速度で起こつた。(中略) 日本人がアメリカ人にかわるにつれて、文化が変わり、価値が変わり、言語が変わり、考え方が変わった。そして子供達にアメリカ人になれと教えた寺院はどうなつたか。寺院はあまり変化せず、その結果死にかけているのである。」(一四一〜一四三頁)

(3) ここで言う、大きな教団とは言うまでもなく、本派本願寺即ち「西本願寺」の教団であり、ハワイでの他の教団に比べて人材も豊富で、極めて良く組織化されていて、全ての面でハワイ仏教界のイニシヤチブをとっていたように見受けた。また、天台宗の荒総長は絵も良くし文も立つ非常に個性豊かなお方であり、ハワイ大学の宗教学科の研究室でよくお会いしたほ

ど研究熱心で、来年はハワイで天台学会を開くとのことで張り切っておられた。さらに、カウアイ島の三好晃一師、彼と私は永平寺での同安居であるが、彼は昨年、カウアイ島の禅宗寺に「平和観音」なる大観音様を建立、今年の一月には永平寺の丹羽禅師を拜請したりして、非常に活発に布教活動をしている。彼の唯一の頼みは、宗旨の正確で信憑性の高い英訳書であつたのは極めて印象的であつた。

(4) アメリカの宗教の信徒数を調べたものに、多少古いが日蓮宗の村野宣忠師のもの(五二、二、一九)がある。それによると、第一位は Roman Catholic Church で四七、八七三、二三八人。第五位は Jewish Congregations (ユダヤ教) で五、七八〇、〇〇〇人。第七位は Eastan Orthodox Church (ギリシヤ正教) 三、六三〇、六五九人。第九位は The Church of Jesus Crist of Lotter-day Saints (モルモン教) 三、〇一〇、四〇〇人。第二位は Jehovahs Witnesses (エホバの証人) 三五九、一四六人である。仏教はやっと三一位に顔を出し、その数は一〇〇、〇〇〇人とされて、以下、一〇万以下は省略されている。

(5) 平成三年(一九一一)の一月二十八日の午後、兼ねてから、チャプル先生が約束してくれていた、アメリカでは坐禅家としてかなり名の知れているという人物の坐禅堂を、先生の引率で、大学院の学生五人、米国の尼僧(チベット仏教系)と台湾の尼僧さんと筆者の九名で訪れた。この坐禅堂は、ハワイ大学より西北の極めて閑静な住宅街の中に位置する。大学から約二〇分程歩き、主道から五〇米ほどの小道を抜けると、菩提樹の



大樹が鬱蒼とした緑陰を形成する小庭のある瀟洒な白い建物がある。それが坐禅堂であった。四〇年程前に建てられた普通の民家を改造したとかで、入ってすぐ左の部屋が、正面に「達磨さん」を安置した一二人が坐われる主坐禅堂、右の部屋が一〇人坐われる副坐禅堂である。単は無く、床に直に坐る形式をとっていたが、各部屋には絨毯が引かれ薄い座布団の上にきちんとした坐蒲がおかれていた。この主である Robert Aitken 師は、瘦身瘦軀、極めて温厚な雰囲気をもつ人物で話し方も極めてゆったりとしていた。師と禅との出会いは、第二次世界大戦の時にグアムで一市民として日本軍に捕らわれ、日本の捕虜収容所にいた時に、奇遇としか考えられないことであるが、同収容所に“Zen in English Literature”の著者である R.H. Blyth 氏がいたことに始まると言われる。世界大戦が終わってからは、師はしばしば日本を訪れ、長岡桑園・安谷白雲の二師に師事したという。勿論、師は臨済系の人である。が、師は、一二月八日からは「只管打坐の「撰心」(あるいは「接心」か)に入ると言っておられたので、あながちそうした宗派というものにはこだわりを持ってはおられないようであった。師の、この日の「講義」は、我々を坐蒲に自由な姿勢で坐わらせ、師は立ったままで、極めてゆっくりとした口調で、中国の「小禅宗史」を概説され、『無門関』の代表的な公案をご自分のご著書に随って小一時間ばかり話され、後は学生達の質問に答えられた。帰り際に、私は、師のご著作である“Taking the Path of Zen”, “The Mind of Clover”, “A zen wave”, “The Gateless Barrier (The mumonkan)”の四冊を頂戴した。こ

ハワイ大学にて(大谷)

の坐禅堂を訪れた時には、米国人で坐禅をしている人達にも友人がいなくもなく、米国人だけで組織された坐禅をする集団の存在を決して知らない訳ではなかったが、実地に米国の坐禅堂を拝覧させて戴くのは初めてであったので、米国でもこんな風に坐禅をしているのだ、との認識することに急で、自分の意識下に残る何か不鮮明な感じのあることをそれほど気にもとめはしなかった。しかし、今年の二月、ロスアンジェルス禅センターを黒柳師に、サンフランシスコの禅センターや男女三〇名ほどが坐禅を主に共同体を形成しているというブルードラゴンテンプルを細川師の案内で訪れるにつれて、ハワイの坐禅堂で感じた奇妙な異和感のある何か不鮮明な意識が肥大化していった。それは、日本の僧堂の雰囲気しか知らない私にとっては、日本でも米国でも同じことをしているには相違はないのだが、何か全く違う意識構造の下でなされているような妙な雰囲気から感じられる奇妙な相違感である。言ってみれば、日本の僧堂と米国の坐禅堂との雰囲気の違いは、些細なことと言えば、日本人になくはない醤油と米国人にとつてのバターという、長い間の食の違いからくる体質が醸し出すものなのかも知れない。文化の違いと言ってしまうとそれまでであるが、言葉は悪いが草食動物の禅と肉食動物の禅との違いぐらいはあると感じた。が、この感じはそこに二三日も滞在すると不思議と慣れてしまうものなのである。しかしながら、そうした雰囲気の相違こそが、仏教がインドから中国へ来てその習俗に融合土着化し、その中国仏教がさらに違う風土の朝鮮・韓国を経て、あるいは中国から直接に日本へ来て、日本の文化と融合・習

合、日本の仏教に変貌し土着化して来たという歴史の延長上の、日本の禅からやがて判然と米国の禅へと変貌するであろう、そうした姿の具現化の一樣相を示しているように感じられずならなかった。

なお、右「二 ハワイ仏教」は、注記を外しその主旨を取りまとめ「ハワイ仏教管見」と題して、『仏教タイムス』紙上（平成四年六月）にも掲載予定である。

### 三、第三回国際法華経学会

第三回国際法華経学会が、本年（平成四年）の一月二一・一二の両日にわたって、ハワイ大学において開催された。

国際法華経学会というのは、ハワイ大学宗教学科のジョージ・タナベ教授と同大学芸術学科のウィラ・タナベ教授ご夫妻が、ご自分たちの専門分野に関係する世界の学者に呼びかけたことに由来する。

第一回国際法華経学会は、ハワイ大学の主催で、一九八四年（昭和五九年）の一二月一七・一八の両日にわたり、ハワイ大学のキャンパスセンターで開催され、日本文化に及ぼした法華経についての教理・歴史・信仰・儀礼・文芸等々の様々な分野からの研究発表がなされた。その成果は、ハワイ大学よりジョージ・タナベ夫妻編『日本文化における法華経』と

して出版されている。

そして第二回目の国際法華経学会は、一九八七年（昭和六二年）の一二月一九（二二日）にわたって、大正・立正両大学の主催で、立正大学において世界の法華経文化を研究する学者が多数集い開催された。

今回、第三回目の国際法華経学会がハワイ大学で開かれたのは、この学会に貢献された立正大学の田村芳朗博士と大正大学の塩入良道博士が平成元年に相次いで他界されたことを偲び、その原点にもどってのことであるという。

今回の国際法華経学会は、一月一〇日の夕刻から、ハワイ大学のイーストウエストセンターのトーマス・ジェハアーンホールでの歓迎晩餐会から始まった。

まず、主催者側のハワイ大学のジョージ・タナベ教授が歓迎の挨拶と西欧側からの参加者を紹介され、さらに大正大学の一島教授が、法華経学会ツアーに参加された日本側の参加者三〇数人を紹介、東京大学名誉教授の平川博士がゲストを代表されて挨拶をされた。

翌一日から、次のようなプログラムの下に熱論が展開された。

第1日	
9:00 ~ 9:10	開会式
9:10 ~ 9:40	第一パネル

議長 ウィラー・タナベ(ハワイ大学) 1..30~1..45

発表者 平川 彰(東大名誉教授) 1..45~2..15

題 法華経一乗仏教の特色 2..15~2..30

評論者 ポール・グローナー(ウァージニア大学) 2..30~3..00

一般討議

コーヒー・ブレイク

第2パネル

議長 斎藤円真(大正大学)

発表者 渡辺 宝陽(立正大学) 3..00~3..15

題 知識人と法華信仰 3..15~3..45

評論者 ジョージ・タナベ 4..45~4..15

一般討議

ランチ

第三パネル

議長 宮 次男(実践女子大学)

発表者 ミミ・ジェンブルクスワン 4..15~4..30

(ハワイ大学)

題 山王信仰・法華経・中尊寺

・一二世紀における藤原清

衡の構想

第2日

評論者 ウィラー・タナベ(ハワイ大学)

一般討議

コーヒー・ブレイク

第四パネル

議長 大谷 哲夫(駒澤大学)

発表者 三崎 良周(早稲田大学)

題 慈鎮和尚と法華経・京都青蓮院吉水蔵『法華別帖私』を中心として

蓮院吉水蔵『法華別帖私』を中心として

評論者 大久保 良峻(早稲田大学)

一般討議

第五パネル

議長 三友 健容(立正大学)

発表者 ジャッキー・ストーン(プリンストン大学)

リンストン大学)

題 法華経とミレナリアニズム

評論者 北川 前肇(立正大学)

一般討議

第六パネル(中止)

9 .. 00 ~ 9 .. 30 第七パネル

議長

発表者 三友 健容 (立正大学)

題 有部教学と大乘批判..特に

法華経を中心として

評論者 アラン・グラパード (サン

タ・バーバラ大学)

一般討議

コーヒー・ブレイク

9 .. 45 ~ 10 .. 15  
10 .. 30 ~ 11 .. 00

第八パネル

議長

デービッド・チャプル (ハ  
ワイ大学)

発表者

ウイリアム・ディール (ケ  
ースウエスタリンザーブ大学)

題

法華経と一一世紀日本仏教  
における正統派の護法論

評論者

糸久 宝賢 (立正大学)

ランチ

第九パネル

議長

渡辺 宝陽 (立正大学)  
ニール・マクマラン (トロ  
ント大学)

題 法華経をめぐる修辞法・論

議長・護法論

評論者 斎藤 円真 (大正大学)

一般討議

閉会式

フリータイム

閉会晩餐会 ワイキキ水族館

1 .. 15 ~ 1 .. 30  
1 .. 30 ~ 2 .. 00  
2 .. 15 ~ 2 .. 30  
2 .. 30 ~ 6 .. 00  
6 .. 00 ~ 8 .. 00

第一日目の夕方六時から、ハワイ大学から徒歩一五分ばかりのところにある、ハワイ大学宗教学科の先生方がよく行くので、ハワイ大学御用達とも言われる、アイゼンバーグ通の中華料理店“メープルガーデン”において、大正大学・立正大学の関係者の主催で、塩入・田村両博士を偲ぶ晩餐会が学会に出席された四〇数人の出席のもとになごやかに有意義に開かれた。

学会最後の日の晩餐会は、第六パネルが取りやめとなったために、比較的早くワイキキのダイヤモンドヘッドよりにあるハワイ大学付属のワイキキ水族館に三々五々集まり、素晴らしいサンセットを眺めながらの和気あいあいのガーデンパーティーが夜遅くまで開かれ、再開を約しての閉会は一〇時を回っていた。

この学会は、ジョージ・タナベ教授夫妻の手作り学会とも

言うべき比較的こじんまりとした学会であるため、私自身もハワイ大学で、初めてその存在を知り、ハワイ大学の一員として教授ご夫妻のその準備に幾らかのお手伝いをさせて戴けたのはありがたかった。

特に、準備段階において、発表者の原稿が全て揃い、それが予めディスカサントにわたり、ディスカサントはそれを十分に分分析する時間的なゆとりを持ち評論するのであるから、聞く側にとっては、この発表者に次ぐディスカサントがあることが、発表者の意図と問題が那邊にあるのがより鮮明化し、次の一般討議がより活発になったのではないかと思う。

今回の発表者は合計九名であったために、その発表時間に三〇分、その評論に一五分、一般討議にも三〇分と時間を割いたために、非常に活発に討議が行われた。なかには梵文のみを振りかざして漢訳を無視する議論などがあったかみ合わない場面も見られはしたが、出席者の殆どの人が討論に参加できる点、日本の学会にはみられない収穫も多く、その点では出席者にとっては極めて有意義な学会ではなかつたかと思う。こうした比較的ゆとりのある学会形式は極めて新鮮なものに写った。

学会開催中には、ハワイ仏教連盟のお歴々、さらには開教師の皆さんが熱心に参加されておられたのは、日本の学会で

はまずお目にかかれない現象とも言うべく開かれた学会として非常に印象的であった。

また、日米を中心とした学者が“法華経”を中心にして集い、本格的に研究の交流ができることは素晴らしいことで、こうした学会が継続されるならば、法華経を中心とした、日米の研究団体として、仏教研究の一大勢力を形成することになるであろう。

ともあれ、主催者側のジョージ・タナベ教授ご夫妻、また日本側の本学会に携わっておられる先生方のご努力、ならびにペーパーが用意されていたとは言え、難解な仏教用語が飛び交うこの学会の同時通訳をされた南山大学のポール・スワソン教授、ハワイ大学のタエコ・ウェリントン先生には最大の敬意を表しておきたい。

なお、この学会の詳細については、大正大学の一島教授が“中外日報”(二月一七・八一日号)に詳細に報告されているので参照されたい。

(平成四年五月三〇日)